

中・晩生品種を用いた枝豆用ダイズ栽培

黒田俊郎・宗友義美

緒 言

蛋白給源としての重要性和稲作転換の必要性から、ダイズの安定多収栽培法の開発・普及が緊急課題となっている。従来、ダイズの子実生産栽培と枝豆栽培とにかかわる研究はそれぞれ異なる視点から展開されてきた。同じ作物でありながら、用途が異なるため別途にあつかわれている現状である。したがって栽培の導入についても、そ菜栽培と普通作物栽培とに分離して検討されることが多い。

しかしながら、畑作物としてのダイズの作物学的特性については全く同一であり、栽培の基本的原則が子実生産と枝豆生産とで異なることはありえない。もちろん出荷時期・価格・流通については両者で異なり、品種の選択についても早晩性・莢実の特性など相違点も多いが、これらは栽培上の問題ではなくあくまでも消費動向に従属した結果であることを銘記すべきであろう。

また、従来の枝豆栽培では高価格時の出荷を意図するため、作物としての特性に合致しない栽培条件（作期・品種）となりやすく、低収・病虫害の多発など、技術上の問題点も多い。

本試験は中・晩生の10品種を用い、岡山県平坦部の播種適期（子実生産）である6月下旬に播種したダイズにつき枝豆の収穫適期を明らかにし、ダイズの特性に合致した枝豆栽培の可能性を検討を加えることを目的とする。

材 料 と 方 法

生態型を異にした標準品種（農林水産省調査基準）7品種と近年育成された高収量品種タチスズ

ナリ・アキシロメ・タマホマレおよび参考として枝豆用品種サッポロミドリ（極早生）を用い、子実生産の場合岡山県平坦部の播種適期とされる1980年6月21日に播種した。前作ソルゴー（当年・早刈）に施用した肥料の残効を考慮し施肥は行わなかった。各区は70cm×20cmの栽植密度（7.1株/m²、1株1本）で、20個体を供試した。

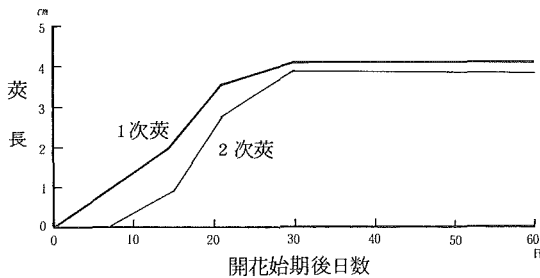
主要生育ステージ（開花始、収穫期）および枝豆収穫適期（莢がほぼ最大に伸長し、子実が枝豆用として出荷できる時期）の暦日を調査し、タチスズナリについては次位別^{注1)}の莢長を測定した。

また、播種期の早晚と枝豆収穫適期の関係を知るため、タチスズナリにつき6月21日、7月3日および7月17日の3回にわたって播種し、同様の調査を実施した。

結 果 と 考 察

ダイズ主茎の開花は1次分枝が着生しない最下位の植物単位から始まり、順次上方に波及する。²⁾ 莢の伸長経過については、開花からほぼ2週間て莢長が最大に達すると言われている^{1, 4)}。枝豆生産の場合、莢実の充実が斉一であることが要求される。開花期間は通常1～3週間におよび、莢実の伸長・肥大過程の個体内変異は枝豆生産にとり重要問題と考えられる。そこでタチスズナリについて開花時期を異にする莢（次位別莢²⁾）の伸長過程の相異を検討した（第1図）。1次花房開花後30日目頃（2次花では23日目頃）に1次莢・2次莢両者が同時に伸長を終了したことが明らかである。またこの時期はほとんどの莢実が枝豆収穫適期であることも認められた。個体内にあっては次位および開花日を異にしてもほぼ同時に枝豆収

注) 枝条の先端に着生する莢を0次莢、腋芽に直接着生する莢を1次莢、腋芽に着生する莢または分枝の腋芽に着生する莢を2次莢と称する（3次莢以下も同様）。



第1図 次位別莢長の推移 (品種タチスズナリ)

第1表 開花始期後30日目における莢長の変異

莢の次位	平均値cm	標準偏差	変異係数(%)
0	4.18	0.23	5.4
1	4.15	0.30	7.2
2	3.89	0.36	9.2
2'	3.47	0.30	8.7
全体	3.96	0.39	9.9

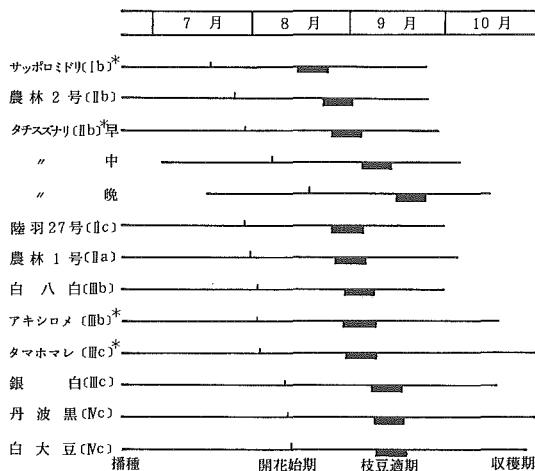
2粒莢のみ計測。2'は2次葉(開花後に葉)を伴わない2次莢。

穫適期となることが確認された(第1表)。従来莢の伸長期間が約2週間とされたのは個々の莢につき開花からの暦日をもって伸長の推移を追跡したためであろう。供試全品種について開花始期後30日目の莢実を観察した結果、ほぼ枝豆収穫適期に相当することが認められた。

また、枝豆として利用可能な時期はいずれの品種においてもほぼ10日間であった(莢実の硬さおよび調理後の味により判定)。

そこで、開花始後30日目を枝豆収穫適期とし、各品種の収穫期(枝豆)を第2図に示した。開花始は品種により異なり、播種後36~53日目であった(極早生品種・晩播区を除く)。したがって枝豆適期は播種後66(8月26日)~83日(9月12日)となり、品種を組み合せれば20日以上にわたって出荷できることになる。

品種特性を知る必要から、栽培密度を比較的疎としたため(特に開花始まで日数の短い品種)、収量性を吟味することはできないが、比較的早生のタチスズナリでさえ莢実生重は200g/個体(114Kg/a)程度であった。したがって複数の品種を用い100~150Kg/aの収量性の枝豆を20



第2図 開花始期、枝豆適期および収穫期

[]内は農林水産省調査基準による生態型の分類。*同基準による標準品種ではないため、生態型の同定は他品種との相対的關係(開花まで日数・登熟日数)による。

数日間連続的に出荷することは容易であろう。

実際栽培にあたっては、品種数を可能な限り減らすことが要請されるため、高収量品種のタチスズナリ、晩生で栽培歴の長い白大豆を用いた栽培体系が検討に値しよう。これによれば8月下旬~9月中旬の連続出荷が可能である。

タチスズナリ1品種を用いて、作期移動による連続出荷も可能である(第2図)。3回の播種により8月下旬~9月下旬の約1か月の安定供給ができよう。

経営的にみれば、販売価格が200円/Kg(莢実)としても20,000円/a程度の粗収益は容易に確保されよう(収量を100Kg/aと仮定)。もっとも、供試品種を代表とする現在の中・晩生品種では外觀(莢の色、毛茸の色・多少)および莢つき位置に問題があり、これらの形質が重視される現在の市場³⁾では高価格は期待できない。

土地利用型作物また稲作転換作物としてダイズの重要性が認識されている今日、西日本で多く栽培される中・晩性品種を用いた枝豆生産の意義は大きいと思われる。

文 献

- 1) 昆野昭晨：農技研報 D27, 139 - 295
(1976)
- 2) 黒田俊郎, 大石保之助, 木下 収, 栗原 浩：
日作紀 48(別1), 43-44 (1979)
- 3) 太田勝美：農業および園芸 51, 677 -
679 (1976)
- 4) 佐藤一郎, 西川昌勝：鳥取農学会報 10,
20-25 (1955)